

教宣 せぶん

被災 55 年 3.1 ビキニデー

「原水爆の被害者は わたしを最後にしてほしい」

墓前行進にむかう隊列は 2 キロにも達していたでしょうか。それぞれの団体が旗を掲げ、ゼッケンをかぶり、JR 焼津駅から墓前までのおよそ 2.5 キロの道のりを、平和を願って行進しました。色とりどりの旗には都道府県が書かれており、全国各地からこのビキニデーに集まっていることが一目でわかりました。

正直、こんなに人が集まる行動だとは思っていませんでした。前夜の損保平和交流会後の懇親会で静岡市内を歩いていると、「3.1 ビキニデー」のバッジをつけた四国から来られたという年配の方の団体に遭遇し、「明日またお会いしましょう」と気軽に話したのですが、とても簡単に出会えるような状況ではありませんでした。

3.1 ビキニ事件

1954 年（昭和 29 年）3 月 1 日未明、アメリカは太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で、広島型原爆の 1000 倍もの威力をもつ水爆実験を行いました。爆発による放射能は西太平洋からインド洋にいたる広大な海域を汚染し、焼津を母港とするマグロ漁船「第五福竜丸」をはじめ、多数の日本漁船やマーシャル諸島島民に大きな被害をもたらしました。

この年の 9 月 23 日、第五福竜丸の無線長の久保山愛吉さん（39 歳）が「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」と言いのこしてなくなりました。広島・長崎・ビキニと三度にわたる核兵器被害は日本国民に大きな衝撃を与え、草の根からはじまった原水爆禁止署名はわずかな期間に有権者の半数にあたる 3400 万筆に達しました。〔2009 年 3.1 ビキニデー「核兵器のない世界を」（原水爆禁止日本協議会）より〕

宿泊した焼津市内のホテルも、私たちを含めてすべてがビキニデーに参加する方々でした。詳しいことはわかりませんが、おそらく数千人規模の行進だったと思います。

前夜に開かれた損保平和交流集会の席上、浦上書記長は「損保産業は平和だから成り立っている」とおっしゃいました。資料には太平洋戦争を前後した損保業界の動きが記されており、戦争によって損害保険会社が国の統制化に置かれ、国策の遂行に協力することを目的に、その社会的使命を変質されていった経緯が書かれていました。こういう「事実」は決して会社から聞かされたことはありません。

損保業界が「金融庁」を過度に意識している現状を目の当たりにすると、「国策」と言われればいとも簡単にその社会的使命を捨ててしまう危険性があることが、容易にうかがえます。そして、そうした「事実」さえも、教訓・反省にするのではなく、闇に葬ってしまう体質があるとも言えます。損保産業が健全に発展していくためにも、私たちは決して戦争を繰り返してはいけません。

墓誌には「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という久保山さんのメッセージが記されていきました。3.1 ビキニデーに参加して、55年前に焼津港を母港にする第五福竜丸をはじめ多数の日本漁船や、マーシャル諸島島民がどういう被害にあったのか、その「事実」の一端に触れることができました。

広島、長崎、そしてビキニと、三度にわたる現実の核兵器被害国になった日本でも、その「事実」を知る方や体験者は年々少なくなっています。いままで語らなかったこと、語れなかったことを、勇気をもって「語らなければならない」「伝えなければならない」と立ち上がっている語り部の方々がたくさんいらっしゃいます。

戦争を知らない、戦争体験者・被爆者と同じ言葉を話すことができる私たちには、いま、「事実」に触れることが求められています。